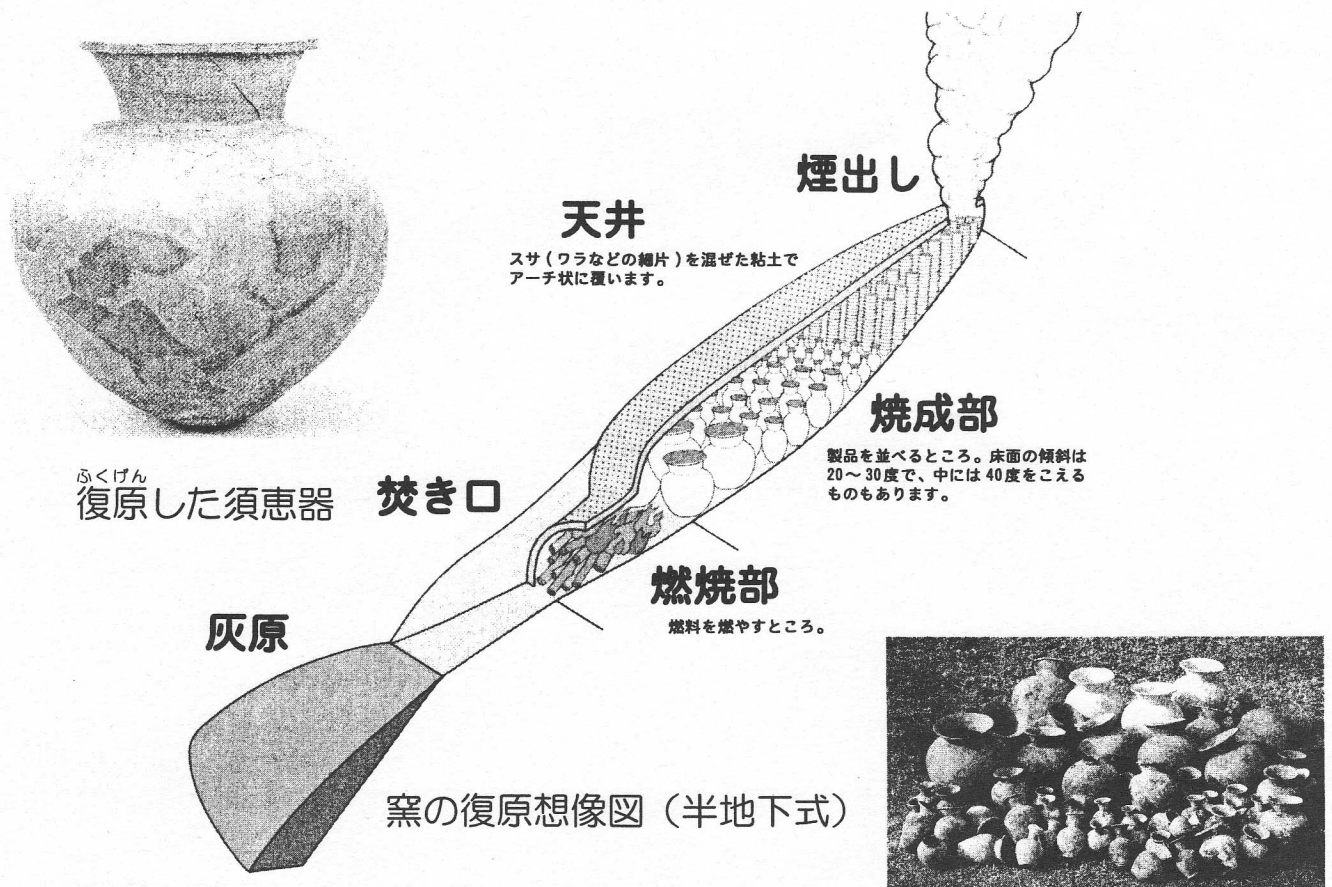


す え き みなみたまかまあとぐん 須恵器と南多摩窯跡群

こぶん 古墳時代の後半に、それまでの素焼の土器とは違った新しい土器を作る技術が、大陸から伝えられてきました。この新しい土器は山などの斜面をトンネル状に掘って作った窯で焼くため、1000 度以上の高温で焼くことができたのです。そのために青みがかった灰色で、硬く水がもれにくくなっています。こうした新しい土器は須恵器とよばれて、つぼやかめ、皿などいろいろなものが作られました。平安時代(千年くらい前)に須恵器を焼いていた窯の跡が、八王子の南、多摩丘陵でたくさん発見されました。それらの窯の跡は「南多摩窯跡群」と呼ばれています。



出土したかけらを復原したもの